

# 千早口駅南遺跡調査概報

南河内広域農道長野工区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書



河内長野市遺跡調査会

## 例　　言

1. 本書は平成2年度に河内長野市遺跡調査会が大阪府南河内耕地事務所から委託を受けて実施した千早口駅南遺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は本市教育委員会社会教育課尾谷雅彦が担当して実施した。
3. 調査に係る事務は調査会事務局井内正忠が主担した。
4. 本書の執筆、編集は尾谷が主担し、中村清美が補助した。
5. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。  
明地奈緒美・今西（杉山）和良・喜多順子・久保八重子・中野雅美・中西和子
6. 調査の実施については下記の方々の協力を得た。  
大阪府南河内耕地事務所・上岩瀬地区自治会・天見公民館
7. 本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

## I 調査に至る経過

大阪府南河内耕地事務所が建設を勧めている南河内広域農道建設に先立ち、平成2年10月に長野工区のうち千早口駅南遺跡に近接する地を対象に試掘調査を実施した。結果、新たにこの予定地についても遺構・遺物が分布することが判明し、千早口駅南遺跡が広がることが確認された。

これをうけて、大阪府南河内耕地事務所と遺跡の取り扱いについて協議が実施され、切り土部分について調査を実施することで合意した。

調査は河内長野市教育委員会の指導のもとに河内長野市遺跡調査会が実施した。調査は平成2年9月11日～平成2年11月30日まで行った。

調査は調査区を便宜上、既往の水田1枚毎に調査区名を配して実施した。北側から第1調査区とし順次南側に4調査区までとした。

## II 位置と環境

調査地は河内長野市岩瀬地区に当たる。北から南下してきた東、西の両旧高野街道が長野町で一つになり、石川の支流天見川によって形成された狭小な河谷に入り紀見峠に向う。この街道が谷部に入り水田が耕作されたやや開けた最初の集落がみられるのが岩瀬地区である。現在は南海電鉄高野線が通り、千早口駅が置かれている。

調査地は、千早口駅の東側約190m、山の西側斜面（天見川の谷側）約1,000m<sup>2</sup>が対象であった。

当遺跡は昭和44年の南海電鉄高野線の複線化工事で発見された中世の遺跡である。当遺跡の西側には高野街道が通り、南北朝時代には觀心寺の岩瀬の関が置かれていたところである。また遺跡の北側には薬師寺があり、共同墓地内には暦応4年（1341年）の刻名のある石造五輪塔が残されている。また、北側の下岩瀬地区には中世の遺物の散布する清水遺跡が所在する。その他、この高野街道の通る天見川の谷には紀見峠までの、谷のやや開けた水田には中世の土器片が散布し、小規模な遺跡が分布している。

高野街道は、高野登山鉄道（現南海電鉄高野線）が開通するまでは、空海の高野山開山以後の宗教の道として、そして、中世以後は河内南部と紀州北部及び大和南部を結ぶ重要な街道であった。このため、街道を見下ろす高所には南北朝から戦国時代にかけての山城も多く築かれた。



第1図 調査地位置図



写真1 第1調査区全景

### III 調査結果

#### A 遺構

第1調査区—調査区の東側が山、北側及び西側はそれぞれ天見川の本流と支流の谷に面している。

遺構面は山側を削り、谷側に5m程度せり出す形で谷側(NV-1)に盛土し整地されているのが判る。

この調査区は今回の調査区の中で広い面積を有しているため多くの遺構が検出された。土坑では北側にスサの混入された焼土壁片が詰まっていた龜跡と考えられるSK-1が上げられる。また、大型の土坑のSK-2からも焼土が埋土中に見られ、一部壁も火を受けていた。

井戸では、SS-1の北側で素掘りの井戸SE-1や南側で石組井戸のSE-2などが検出されたが、SE-2などは深度が深く危険のため掘削を中止した。

また、溝では調査区の南側に集中して東西南北に走るのが確認された。これらの溝は建物に付随する可能性がある。

石組を伴う遺構では方形の石組遺構SS-1が検出されている。また、SK-12の上坑を区切るものやSD-4を区切るもの、SD-5に付属する暗渠のようなもの



第2図 第1調査区遺構平面図



写真2 SS-1（南から）



写真3 SW-3（南から）

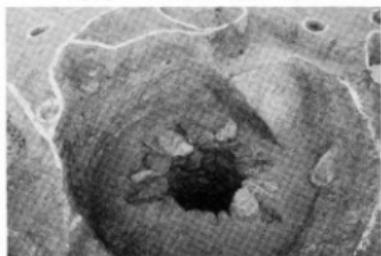


写真4 SE-2（南西から）



写真5 土器出土状況

も検出されている。これらは、いずれも水利用に関係あるようである。

建物については中央部に据立柱建物に復元可能だと考えられるピットの並びも見られる。

調査区の南側は谷部となって第2調査区に続いている。調査区の平坦部の最大幅15m内盛上部分の幅5m、長さ30mであった。



写真6 第2調査区全景



第3図 第2調査区遺構平面図

第2調査区—この調査区もまた北側中央が高く平坦部をなし、北側の第1調査区との境は一段下がり、南側の第3調査区へ徐々にレベルを下げている。

遺構は第1調査区と同様に集中している。南東隅には直径10mを越える池状の遺構SX-1があり、一部石組も見られた。この埋土からは近世遺物も多量に出土している。岡池の可能性がある。

土坑には大型のものではなく、径が1.8mないし2mの小型の円形土坑が多い。

また、溝は南側の一段下がったところに集中し、ほぼ南北か東西にはする。

北側は一段高くなった平坦部を成し、建物の復元できる可能性がある。この平坦部の東側には東西に溝SD-15がめぐる。いずれの溝も素掘りで、幅も狭く深さも浅い。

調査区の北側端の西側には石垣SW-5が築かれていた。

石垣は川原石を利用して2段ないし3段で構築されていた。このことは第1調査区との間は石垣によって区画されているようである。

また、石垣の検出例は、本市内での調査では初見である。

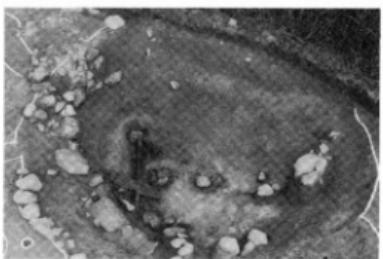


写真7 SX-1 (西から)



写真8 SW-5 (西から)

第3調査区一調査区の面積も少なく、2分の1以上は溝が確認され、遺構の全容は把握できなかった。

検出された遺構は第2調査区との間に東西に走る幅2m以上の溝SD-26と南側の幅6m以上の溝SD-28が大部分を占める。SD-28の南側は同じく東西に走るSD-29と重複し、SD-29は出土遺物から近世の遺構である。また、SD-26もその出土遺物から近世の遺構と考えられる。

また、調査区の北東側の土坑SK-27内からは良く焼き縮まった焼土の広がりが見られた。これを残留磁気測定によって年代推定を実施した。AD1250年±75年の年代がしめされた。

その他、ピットも検出されたが建物を復元するに至っていない。

当調査区は第2調査区同一区画と考えられ、北側は石垣SW-5、南側は溝SD-28によっ



写真10 第3調査区全景 (北から)

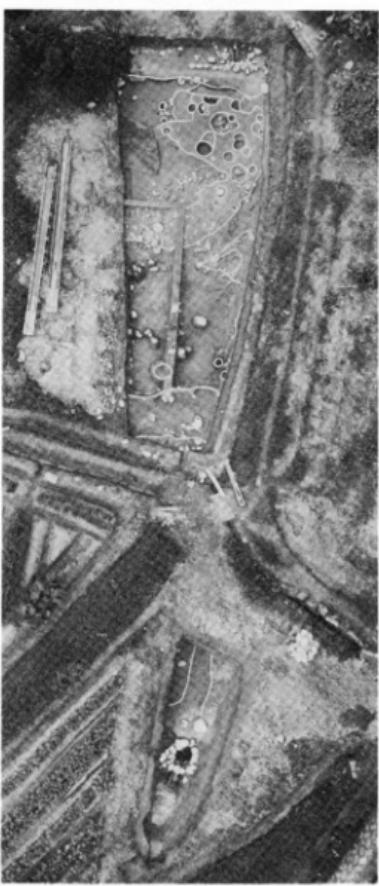
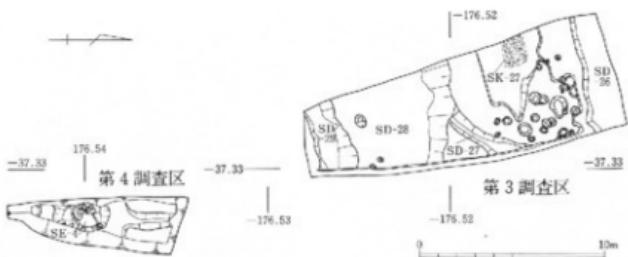


写真9 第3・4調査区全景



第4図 第3・4調査区遺構平面図



写真11 SE-4（西から）  
て区切られている。

第4調査区—現況G Lが今回の調査区の中で一番高所であったが、遺構面は低く、最終的には第3調査区の遺構面と大過ないと思われる。

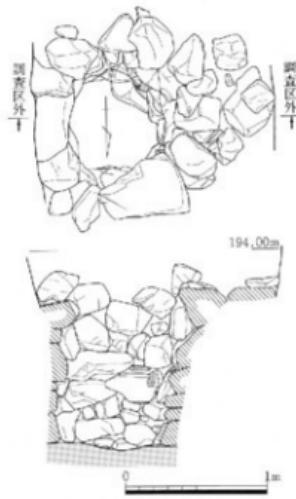
調査区内からは石組井戸SE-4と井戸に向かって南北に溝が検出された。井戸内部からは建石材が出土している。

この調査区が今回の調査の南端に位置する。また、遺構の範囲でも南端となるようである。これより南側は山の斜面となる。

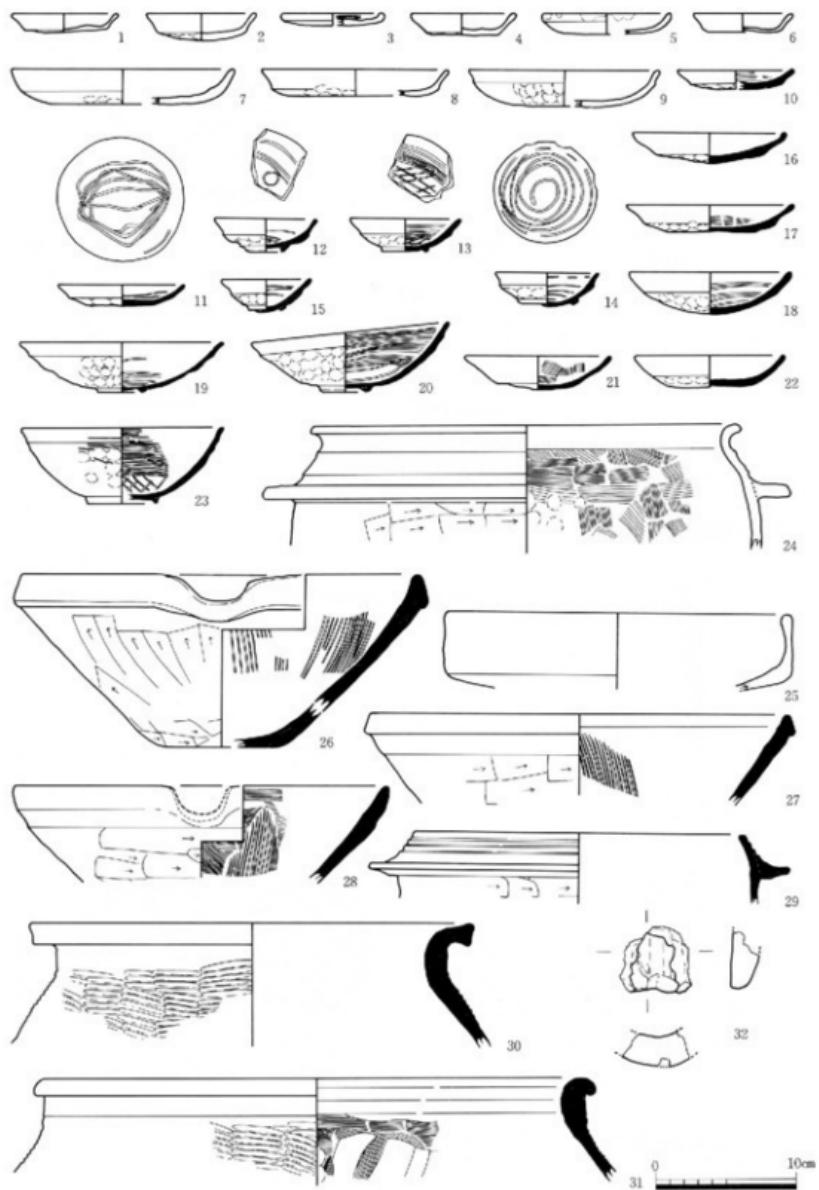
#### B 遺物

出土した遺物はコンテナ数にして170箱を数え、主に土師質土器（小皿、羽釜等）、瓦器（小皿、小塊、塊、鉢等）、陶磁器（青・白磁、備前焼、伊万里焼等）、銅錢、鐵製品、瓦類等が出土した。中でも瓦類が約100箱をしめた。

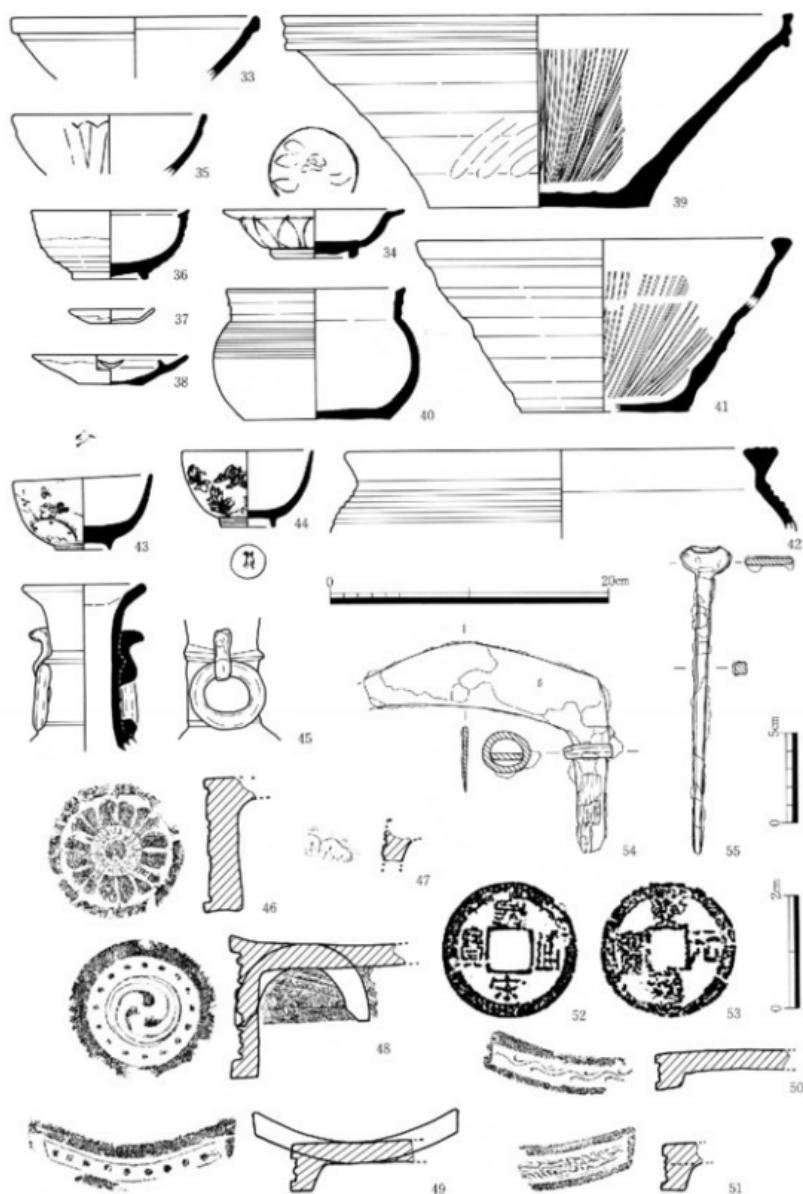
土師質小皿（2・4）がSD-28、SK-10から一括出土したのをはじめ、内面に暗文を施す瓦器小皿（10・11）や瓦器小塊（12～15）、見込部に平行線暗文を施す瓦器塊（19・20）や粗雑な暗文及び刷毛目を施すもの（16・17・21）等が主を成す。その他口縁部を「く」の字形に外折する土師質羽釜（24）、実測団化していないが紀州系の上器片、龍泉系青磁碗（35）及び内面に花刻文を施す青磁皿（34）、焼土坑SK-2からは、銅錢「皇宋通宝」（52・53）等が出土した。



第5図 SE-4 遺構実測図



第6図 出土遺物実測図(1)



第7図 出土遺物実測図(2)

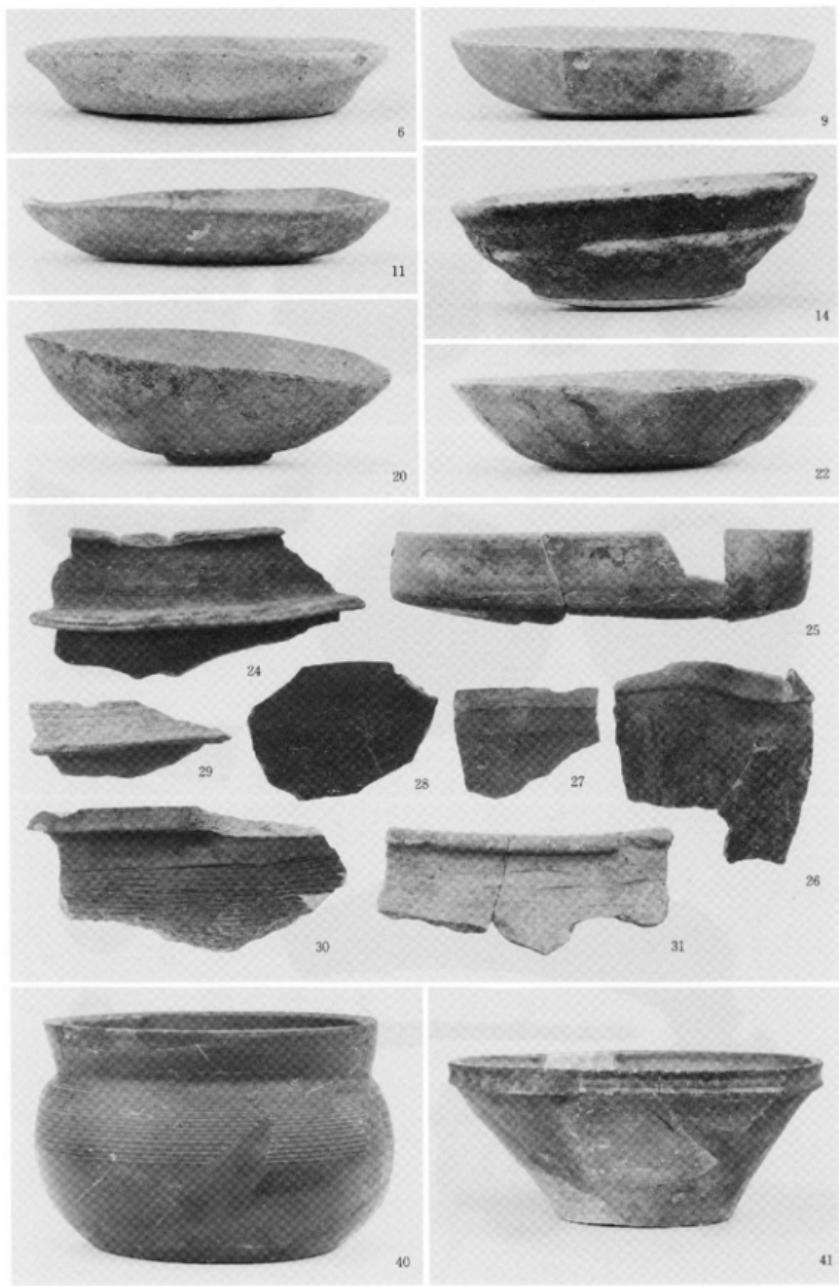


写真12 SK-12(26), SD-13(31), SD-28(9・14・30), SE-4(6・22・24),  
NV-1(11・20), SX-1(25・27・29・40・41), 包含層(28)

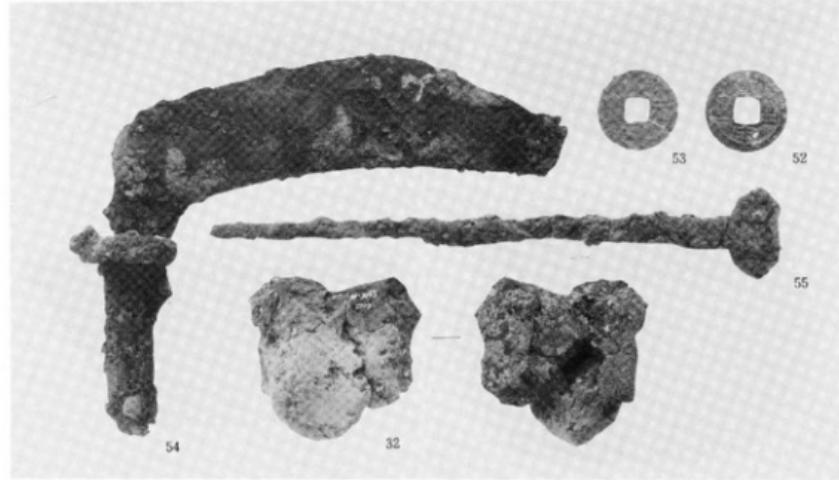
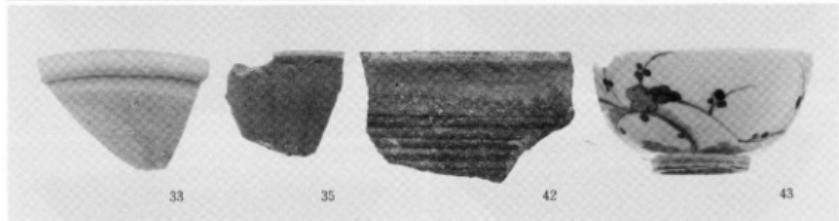
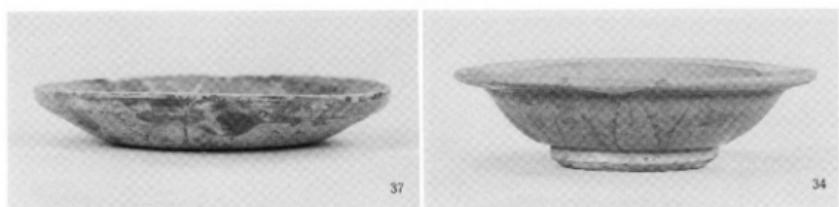


写真13 S K - 2 (52~55), S K - 15(35), S D - 26(42・43), S P - 28(32・46),  
S D - 29(37), S E - 3(48), S W - 3(49), N V - 1 (33・34), S X - 1 (50), 包含層(51)

第3調査Bから瓦器小塊をはじめ灯明皿（5・37・38）、花瓶（45）等の仏具類も出土している。上層遺構からは、染付碗や備前焼すり鉢等16世紀後半頃のものも見られる。瓦類の中では、蓮華連弁文を施す軒丸瓦（46・47）が出土しており、やや古い時期のものも見られた。

以上の結果から、出土した遺物はおよそ13世紀中頃から15世紀初め頃（鎌倉時代～時代）に相当するものが主を成し、若干量ではあるが16世紀後半頃（江戸時代）に相当するものも見られた。

## IV まとめ

調査の結果、当該地の遺構は、その瓦の出土の量、出土土器の内、青磁・白磁類や花瓶の出土など仏具類と考えるものがあり、寺院跡であることは間違いない。寺院は山の斜面の微形地を利用して、小テラスを一区画とし調査地内で3ないし4区画によって構成され、テラス上に建物が建てられていた様である。

時代的には鎌倉時代から室町時代と江戸時代の遺物が出土しており、中心は鎌倉時代と考えられる。

この寺院については、文献上には見られず名前も判明しない。さらに、この寺院は火を受けた様子があり、一度焼失したようである。また、この寺院の谷を隔てた南側には薬師寺があり、境内には應永4年（1341年）銘の刻まれた五輪塔があり、当遺跡との関係が重要と思われる。

また、遺物では今回の調査で、注目されるのは中国同安窯の菊花文皿や龍泉窯の青磁碗等が見られる。また、瓦では最末期の蓮華文軒丸瓦が出土し、その時代考収を複雑にしている。土器類では瓦器や土師質土器が多量に出土し、中には紀州系の土器も混じっている。そのた、磁石や鉄器類も多く出土している。

以上のように発見された寺院は、中世の高野街道と寺院、村と寺院の関係を良好に示す資料であった。今後の整理作業で詳細が判明すると考えられる。

